

生活期へバトンタッチする立場にある回復期リハ病棟で働く私たちは、かかわる1人ひとりが地域（社会）生活に戻り、生活を継続されること、もう一步踏み込めば「その人らしい」生活を継続されること——の大切さを今更ながら強く意識せざるを得ない。自宅退院後の生活を改めて見渡すと、介護保険などのフォーマルな制度につないでサービス利用される例が依然多い状況が伺える。ただ、フォーマルサービスだけで「その人らしい」生活にどの程度届いているのか少々気がかりだ。

NPOやボランティアグループによるサロン、食事会、ゴミ出しの支援、宅老所、宅食、友人・知人による安否確認、話し相手、外出の付き添い、宅配業者の見守り支援、高齢者生協等々のインフォーマルサービスにつないでいく例はまだまだ少ない印象をもっている。

そんな現状もあって、私たちの法人では職員が地域活動に積極的に取り組んでいくための「地域リハ推進部門」を3年前設置した。同部門の主な活動は、①地域で住民が「集う」ことを支援（例：患者会、食事を楽しむ会など）、②当事者・介護者・支援者らが学び「育む」場づくりを支援（例：健康教室、介護教室など）、③市町が催す種々の講座・会議に「出る」支援（例：サロン、

地域ケア個別会議など）——の3つである。

関連して当院は昨秋、長崎市のモデル事業「長崎市在宅支援リハビリセンター推進事業」を受託した。セラピストの積極的な地域関与を通じて地域リハの基盤を3年がかりで整備する構想である。地域密着型リハの推進により（1）かかりつけ医との連携強化、（2）センター外部のリハ専門職による支援体制構築（3）地域のケアマネジャーや介護従事者等のリハ知識・技術の向上、リハ関連の

相談への助言・同行訪問、（4）高齢者の自主的活動への参加促進——を目指し市内を8区域に分け、各区域の病院または老健施設の1つを同センターとして業務委託する。

こうした地域活動は回りハ病棟の豊かな人的資源を活用し、住民の自助・互助の力を高める取り組みといえる。入院中設定

した目標、専門職が行った指導や助言、福祉用具の使用具合などさまざまな生活状況を踏まえ住民の方々に直接かかわれる分、学ぶことも多いはずだ。私たちは、地域での生活を継続している方々やそれを支えている関係者の声を聞くことのできる場に足を運び、多少耳の痛い指摘でも謙虚に聴き対応する姿勢が必要だ。回りハ病院関係者が地域の関係者と一緒に考え、行動していく段階に入っている。

### 巻頭言

## 地域活動——関係者と一緒に考え行動しよう



井手 伸二

当協会理事 PTOTST委員会 委員

（長崎リハビリテーション病院 臨床部 部長、理学療法士）